⑶　映画『浅田家』

コロナ禍で演劇やコンサートから遠ざかる日々が続く一方、映画館はいわゆる三密対策を取りやすいと言われているためか比較的行きやすい。三重県で話題の映画『浅田家』を観に出かけた。 この映画は津市出身の写真家で、自身の家族のユニークな肖像写真を取り続け木村伊兵衛写真賞を受賞した浅田政志氏と彼を支え続けた家族の実話を映画化したものである。浅田氏は地元でこの数年ちょっと知られた存在となり、映画は公開前から新聞やテレビでそのコスプレ写真とともに大きく取り上げられ、写真展も同時に開催された。

映画『浅田家』は「弟は家族を巻き込んで写真家になった」という兄（妻夫木聡）のナレーションによって父の葬儀の日の場面から始められる。映画前半は「なりたかったもの」「やってみたいこと」のシチュエーションに合わせ家族全員がコスプレして演じた場面の写真集『浅田家』（2009）に収められた写真を手がかりに家族間の記憶を手繰り寄せて写真家浅田政志の独り立ちまでをコミカルに描いている。後半は東日本大震災で浅田氏が写真洗浄ボランティアを行なった際の記録『アルバムのチカラ』（2015）とそこからヒントを得て創作されたエピソードを交えて進行する。ある写真家とその家族の実話を基にしたスピンオフ作品であり写真と写真を撮ることを巡る一連の物語の映画化である。

浅田家は母（吹雪じゅん）が看護師で家計を担い、父（平田満）が家事全般を引き受けている。二男政志（二宮和也）は欝々と海を見つめるばかりであった写真の専門学校生の時、「1 枚で如何に自分を表現するか」という課題の卒業制作を求められる。悩んだ末に彼が撮ったのは、父、兄、自分がケガをして母の病院に搬送されたときを再現した、包帯姿の男 3 人とあきれた表情で頭を抱える看護師の母の集合写真であった。その後彼は家族全員がコスプレした写真を撮り続ける。

父のなりたかった職業は消防士であった。普段家事一般を担っている温かく優しい父が火事の消火活動に従事する消防士と答えたのは冗談めいているが、消防服姿の父は凛々しくうれしそうだった。母は白衣の天使とは真逆の極道の妻になり、兄はサーキットを疾走するレーサーに扮した。家族が一丸となってパンの大食い大会の出場者やラーメン屋、泥棒にまでなった。一連のなりすまし写真は、本当はそうであったかもしれない家族の別の姿や本来の性向を暴露しているように思われた。映画では撮影交渉の過程や現場とともに写真の一枚一枚が浅田氏自身の撮影によってかなり忠実に再現されている。荒唐無稽な演技を繰り返す実在の人々をモデルにした『浅田家』は家族のつながりや思いやりを描く一方で、一般に理想とされるの家族像とその欺瞞やプライバシーの名の下の現代社会における匿名性の高さを笑い飛ばした。様々なコスチューム写真は、現代社会の光と影を捉えているのである。

写真賞を受賞した後、撮影依頼の仕事が順調に増えていく。政志は、被写体となる依頼主とその家族をよりよく知ることが大切として、話し合いを重ねながら家族写真の撮影を虚構の助けを借りて行なう。自分たちで描いたお揃いの虹の T シャツを着た不治の病の子の家族の写真や満開の桜の花を散らせて撮った入学祝の記念写真など撮影の様子とその写真が再現される。被写体となっている人たちが震災や病のためにこの世にいないかもしれないという想いが、静止した写真の中に封じ込められた生の時間を意識させるドラマとなった。

後半は、それまでのコミカルな内容と打って変わる。東日本震災後政志は写真家として何ができるのかと思い悩みながら写真洗浄のボランティアを手伝う。映像は写真に対する拒否反応や、失った写真を見つけたときのうれしそうな表情を丁寧に映し出す。多くを失った被災者たちにとって蘇った写真は、過去の記憶を手繰り寄せたり非情の現実を突きつけたりする一方で、未来へと希望をつなぐ支えとなりうるのであった。父を亡くした女の子が写真を撮ってほしいと政志に纏わりついてきた。当初は写真は撮らない／撮れないと拒んでいた政志だが、写真のチカラに気づきまた少女と共有する時間が増えるにつれ、考えを変える。彼は多くの命を奪った海辺で、その子の亡くなった父親の時計を持ってシャッターを押す。浅田家とは直接関係ないこの創作エピソードは幾分冗長に感じられた。しかし、写真における生と死の関係性や必ずしも血縁によらない人と人とのつながりの可能性とその限界を浮き彫りにする役割を果たしていると考えられる。

一家で食べるお寿司や幼馴染で彼を支え続ける妻若菜（黒木華）とのしゃぶしゃぶなど、作品中で食べる場面が多く印象的であるのは、食も生と関係しているからである。政志の家族写真の良さを認めた女性編集者（池谷のぶえ）は、職場でスルメをあぶり一升瓶から彼に酒を勧めながら、写真集出版を申し出る。出版は写真に新たな生命を吹き込み社会に送り出す行為である。その決断がスルメを肴に豪快に酒を飲み干す姿に重ね合わされる。

海の様々な表情も繰り返し映し出された。三重の海と被災地の海である。海は命を育みもするが奪いもする。また求めなければ何も応えない厳しさといつも見守っている優しさがある。映画『浅田家』は海と対話を繰り返しながら生きる「家族というもの」の動く写真集なのである。

映画の終わり近くで父の葬儀の写真もコスプレで撮られていたことが、死装束の父がむっくり起き上がってきたことで判明した。本当の葬儀の場面とコスプレの場面は区別がつかなくなった。また最後に映画中の家族写真と現実の浅田氏の家族写真とが入れ替わると、両者が大変良く似ていることに驚くと同時に既視感を覚えた。シェイクスピアの喜劇『十二夜』において海で遭難して生き別れになっていた双子の兄妹が顔を見合わせる場面である。それまでの劇中の混乱は変装と人の取り違えに拠ると判り愛が実る。人々は、「自然のだまし絵」は結局は正しいことを示していたと納得するのである。

『浅田家』においてはコスプレがユニークなのでなく、現実にいそうにないが実在している浅田家の人々が仮装した身体でもって社会の実相を表し、さらにその姿をスクリーン上にさらけ出したことがユニークなのであった。映画中の家族写真はコスプレをコスプレしたものでオリジナルと見分けがつきにくい。二宮和也は演技で涙を流したが、それは本当の涙に見えた。作品世界を楽しみながら、生と死、写真と映画、虚構と真実における関係性と揺れ動く理想の家族像に思いを巡らしているうちに、現代社会において美化される傾向にある家族の絆は虚構であるかもしれないと思われてきた。

（服部厚子　記）